

リズム体操

—作品提示型の授業実践報告—

滝沢かほる^{*1}、丸山久志^{*2}、末武恭子^{*3}、佐藤 仁^{*4}

Rhythmical Gymnastics In Elementary School

Kaoru TAKIZAWA, Hisashi MARUYAMA, Kyouko SUETAKE
and Hitoshi SATOU

第1章 はじめに

中央教育審議会の「健やかな体を育む教育のあり方に関する専門部会」では説明責任を果たすべく、ミニマムの洗い出しが急務とされている。その具体的内容の筆頭に身体能力が上げられている。¹また、新潟県教育委員会においては体力低下の現状を踏まえ、「新潟県体力テスト」と健康増進・体力向上のための「1学校1取組」を実施している。それを受けて、各学校では積極的な取り組みがなされているが、その取り組みのほとんどは行間運動やドリル的な内容であり、体力テストの数値を上げるためにトレーニング中心の体育に逆戻りするのではないかとということが危惧される。

このような現状を考えると、体育授業の中で楽しみながら体力向上に取り組めるリズム体操に期待するところは大きい。体操は、全身的でリズムカルな動きを核として、音楽に合わせて身体を動かし、楽しみながら、自分の動きや身のこなしをよくし、知らず知らずのうちに、健康や体力を身につけていく。そのことに着目し、滝沢らは、いろいろな動きの経験と工夫を楽しみながら、結果としてよりよい身体と動きが同時につくられていく授業展開を提案している。²この授業展開は、これまで体操の指導を敬遠しがちであった教師（曲に合わせて全身をリズムカルに動かすといったことが苦手な男性教師）にとっても実践しやすいものであることが報告されている³。

リズム体操の効果については、松原らが「はずみ」と「振り」の運動経過の変容についてビデオ映像による動作分析とフォースプレートを用いた床反力から検討を加えリズム体操の運動学的学習効果を明らかにしている⁴。さらに、松原らにより、作品提示型の授業ⁱと作品創作型の授業ⁱⁱを比較した場合、作品提示型の授業のほうが動きの上達と動きの理解に関わる成果が高いことが明らかにされている⁵。また、作品提示型ではグループ学習に関わる楽しさや成果が低くなる傾向があることについても指摘されている。

そこで、作品提示型の授業展開ⁱⁱⁱに、グループ学習の楽しさを損なわない工夫を加味したリズム体操の授業実践を行い、指導の実際と問題点・効果を明らかにしていきたいと考えた。

*1 新潟大学教育人間科学部

*2 新潟県新発田市立五十公野小学校

*3 新潟県新発田市立五十公野小学校

*4 新潟県新発田市立五十公野小学校

i 弾む、振るなどの運動を中心に一連の運動として構成された作品を教材とする授業

ii 運動の構成を自分たちで考え、作品を創作し、これを教材とする授業

iii 高山雄一（胎内市立中条小学校）の授業展開（2005年6月、胎内市立中条小学校にて実施）を参考

第2章 実践の概要

小学校5年生58名・6年生60名の児童（欠損値等の関係で統計処理のサンプル数は5年生が $n=57$ 、6年生が $n=58$ ）を対象に、滝沢らの提案する授業展開に基づき、「手具なし体操」（表一参照）の実践を行った。本単元では、学習教材として、平成15～17年度文部科学省研究費「感性教育のためのリズムカル・ムーブメント・プログラムの開発（研究代表者 滝澤かほる）」のために作成されたリズム体操作品^{iv}を使用した。動きに合わせて音楽が作曲されており、小学生が、よりよい動きを身につけ、基礎的な体をつくるための教材である。

表一 手具なし体操の一連の動き

番号	動きの概要	動きのヒント
1	前へ移動	1234ジャンプ ジャンプ 1234ジャンプ ジャンプ
2	後ろへ移動	1234ジャンプ ジャンプ 1234ジャンプ ジャンプ
3	胸部の開閉運動	胸部の開閉 ボディーパーカッション×2
4	向き変えジャンプ	手を横→縦→横 ジャンプジャンプ
5	突き上げ	しゃがんで 大きく突き上げる
6	1周	自分の後ろに円を描く
7	左右振	1234 1回転 1回転 1234 1回転 1回転
8	大きく1回転	123 223 323 423
9	前後振	膝を使って弾むように腕を前後に振る
10	バランス	6で戻る
1	前へ移動	1234ジャンプ ジャンプ 1234ジャンプ ジャンプ
2	後ろへ移動	1234ジャンプ ジャンプ 1234ジャンプ ジャンプ
3	胸部の開閉運動	胸部の開閉 ボディーパーカッション×2
4	向き変えジャンプ	手を横→縦→横 ジャンプジャンプ
5	突き上げ	しゃがんで 大きく突き上げる
6	1周	自分の後ろに円を描く
最後	フィニッシュ	大きな丸トントンパツ 大きな丸トントン小さくなってパツ

単元は6時間で構成し、第1時間目は、児童にリズム体操作品の1連の動きをつかませるために、よい動きのモデルとして、作品構成者の榎本暢子をゲストティーチャーとして招いての指導を行った。単元の導入として、いくつかの動きを経験させ、児童の心を解きほぐしていった。その後、ゲストティーチャーにより、教材となる作品を提示した。その際、動き方や、よい動きのポイントをゲストティーチャーに解説してもらいながら、一連の動きとしての経験をさせた。2時間目は、前時で学習した一連の動きの内容を確認し、ゲストティーチャーから教わったよい動きのポイントを

^{iv} リズム体操作品「手具なし体操」

構成：榎本暢子（新潟県体操研究会）

協力：齋藤 薫 猪又悦子 滝澤かほる（新潟県体操研究会）

作曲：森下 修次（新潟大学）

確認しながら、動きの順序を覚えることを課題とした。

3、4時間目には、動きの質を向上させることをねらいとした。どのようにして動きをよくしていくかを考えさせた。グループ学習が中心となった。教師は、空間を大きく使おうとしている場面や弾みを使おうとしている場面を捉えて肯定的なフィードバックを与えることでグループを支援した。

5、6時間目は、発表形式とした。前時までにグループごとに練習してきた成果を見合う活動を行う中で、グループや、個々の練習成果を認め合った。

第3章 調査方法

第1節 形成的授業評価

高橋ら（1994）⁶によって作成された、9項目（表一2参照）からなる形成的授業評価法を、体育授業による成果、意欲・関心、学び方、協力についての学習効果を知る手がかりとして用いた。毎回授業の最後に、授業を受けたすべての児童に形成的授業評価の質問項目に回答させた。なお、回答は「はい」に3点、「どちらでもない」に2点、「いいえ」に1点を与えて統計処理を行った。

表一2 形成的授業評価の項目

成 果	ふかく心にのこることや、感動することがありましたか。
	今までできなかったこと（運動や作戦）ができるようになりましたか。
	「あっ、わかった!」とか「あっ、そうか」と思ったことがありましたか。
意 欲 ・ 関 心	精一杯全力を尽して運動できましたか。
	楽しかったですか。
学 び 方	自分から進んで学習することができましたか。
	自分のめあてにむかって何回も練習できましたか。
協 力	友だちと協力して、なかよく学習できましたか。
	友だちとおたがいに教えたり、助けたりしましたか。

第2節 診断的・総括的授業評価

高橋ら（1994）⁷によって作成された、20項目（表一3参照）からなる診断的・総括的授業評価法を、体育授業に対する楽しさ、学び方、技能、協力に関する取り組み方の変容を知る手がかりとして用いた。単元開始前と単元終了後に、それぞれの質問項目に回答させた。なお回答は「はい」に3点、「どちらでもない」に2点、「いいえ」に1点を与えて統計処理を行った。また、学習前後の有意差検定（対応のあるt検定）を行った。

表—3 診断的・総括的授業評価の項目

楽しさ(情意目標)	<p>体育では、みんなが楽しく勉強できます。</p> <p>体育は、明るくてあたたかい感じがします。</p> <p>体育をすると、体がじょうぶになります。</p> <p>体育では、せいっぱい運動することができます。</p> <p>体育で、体を動かすと、とても気持ちがいいです。</p>
学び方(認知目標)	<p>体育をしているとき、どうしたら運動がうまくできるかを考えながら勉強しています。</p> <p>体育をしているとき、うまい子や強いチームを見てうまくできるやり方を考えることがあります。</p> <p>体育で運動するとき、自分のめあてを持って勉強します。</p> <p>体育で習った運動を休み時間や放課後に練習することがあります。</p> <p>体育では、友だちや先生が励ましてくれます。</p>
技能(運動目標)	<p>わたしは、運動が、上手にできるほうだと思います。</p> <p>わたしは、少しむずかしい運動でも練習するとできるようになる自信があります。</p> <p>体育では、自分からすすんで運動しています。</p> <p>体育が始まる前は、いつもはりきっています。</p> <p>体育では、いろいろな運動が上手にできるようになります。</p>
協力(社会的行動目標)	<p>体育では、いたづらや自分勝手なことはしません。</p> <p>体育では、クラスやグループのやくそくごとを守ります。</p> <p>体育では、先生の話をきちんと聞いています。</p> <p>体育で、ゲームや競走をするときは、ルールを守ります。</p> <p>体育で、ゲームや競走をするとき、ずるいことやひきょうなことをして勝とうとは思いません。</p>

第4章 結果と考察

5学年・6学年ともに はじめ「一連の動きの経験」→なか「動きの質の向上」→おわり「発表」という単元構成であるが、先行して実践した6学年の形成的授業評価の結果を受け、5学年においては若干の修正を加えながら実践を行った。したがって、学習の流れが若干異なっているため、ここでは5学年と6学年を分けて考察を加えていくこととする。

第1節 各学年の授業実践

ア、5学年

表—4 5学年の単元構成

	一連の動きの経験		動きの質の向上		発表	
時間	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目
学習の流れ	一連の動きをつかむ	一連の動きを覚える	「向き変えジャンプ」と「突き上げ」の動きを深める	「大きく一回転」と「前後振」の動きを深める	中間発表会	発表会
主な内容	ゲストティーチャーによるインストラクション	・めあての確認 ・通し練習2回 ・ペア学習による教えあい ・クラスごとの体操と教師の評価	・めあての確認 ・通し練習2回 ・ミニレクチャー ・ペア学習による教えあい	・めあての確認 ・通し練習1回 ・ミニレクチャー ・グループ学習による動き練習	・通し練習1回 ・グループ編成 ・グループ練習 ・クラスごとに中間発表会 ・友達からの評価	・通し練習1回 ・グループ練習 ・全体で通し練習1回 ・グループごとに発表（ビデオ） ・ビデオを見る ・友達からの評価 ・教師のコメント

5学年は表—4のような単元構成であった。各時間の内容は以下のとおりである。

1時間目

ゲストティーチャーによる指導。導入は簡単な動きの模倣や柔軟など楽しい雰囲気の中で行い、徐々に「一連の動き」をつかむための指導に入っていった。それぞれの動きに解説を加えながら、繰り返し一連の動きを行った。

2時間目

ゲストティーチャーの動き（ビデオ映像）をプロジェクターで拡大投影したものをしながら一連の動きを覚える活動を行った。ペアを作ったの見合い教え合いを行った。ここでは、褒める・励ますといった肯定的なコメントをするよう促した。児童間のコメントは肯定的なものを中心に動きの順番に関するアドバイスなどもなされていた。さらに、クラスごとに体操を行い、実施後に他クラスからの拍手と、教師からのコメントというかたちで評価する活動を行った。その際、一連の動きを、どれだけ覚えられているかを評価の観点とした。他クラスから大きな拍手をもらい、友達から個人的に自分の動きについて肯定的なコメントをもらい、満足する児童が多かった。教師からのコメントでは一連の動きを覚えるということに対する肯定的な評価のみならず、次時以降の活動への伏線として動きの質の高い児童を認めることも行った。

3時間目

本時は「突き上げ」と「向き変え跳び」の動きを深める時間であった。動きを深めるために、パソコンによる映像をプロジェクターで拡大投影し、児童にゲストティーチャーの動きを観察させた。その際に教師が動きのポイントについてアドバイスをを行った。この後、2時間目と同じペアでアドバイスをしあったが、評価の観点がはっきりしなかったため、児童相互のアドバイスは有効なもの

とならなかった。

4 時間目

ウォームアップとして1連の動きを1回行った。その後「1回転」と「前後振」の動きを深める指導を行った。前時に引き続いて動きを深める時間であったが、ビデオは使用せず、教師の動きを見て練習を行った。「1回転」の動きは比較的よくできたので「前後振」の動きに時間をかけて練習を行った。

5 時間目

ウォームアップとして1連の動きを1回行った。その後、仲のよい友達同士でグループを作成し、グループごとに苦手な動きの練習を行った。その際、音楽は流さなかった。練習の成果を確認するためにクラスごとに中間発表会を行い、出来栄を評価しあった。

6 時間目

ウォームアップとして1連の動きを1回行った。その後、グループごとに練習を行った。さらに全体で通し練習を1回行った後、クラスごとに本番発表を行い、その様子をビデオに撮影した。撮影したビデオを見ながら、友達の動きのよさを評価しあい、自分たちの動きの深まりを確認した。

イ、6 学年

表—5 6 学年の単元構成

時間	一連の動きの経験		動きの質の向上		発表	
	1 時間目	2 時間目	3 時間目	4 時間目	5 時間目	6 時間目
学 習 の 流 れ	一連の動きをつかむ	一連の動きを覚える	「向き変えジャンプ」と「突き上げ」の動きを深める	「大きく一回転」と「前後振」の動きを深める	中間発表会	発表会
主 な 内 容	ゲストティーチャーによるインストラクション	・めあての確認 ・通し練習2回 ・ペア学習による教えあい ・クラスごとの体操と教師の評価	・めあての確認 ・通し練習2回 ・動きのポイント発見 ・ペア学習による教えあい	・めあての確認 ・通し練習1回 ・ミニレクチャー ・一斉学習による動きの練習	・大縄跳びでウォームアップ ・通し練習1回 ・グループ練習 ・グループ発表	・ランニング ・通し練習1回 ・前時の発表をビデオで確認 ・グループ練習 ・グループ発表 ・ビデオ確認

6 学年は表—5 のような単元構成であった。各時間の内容は以下のとおりである。

1 時間目

ゲストティーチャーによる指導。導入は簡単な動きの模倣や柔軟など楽しい雰囲気の中で行い、徐々に「一連の動き」をつかむための指導に入っていた。それぞれの動きに解説を加えながら、繰り返し一連の動きを行った。

2 時間目

ゲストティーチャーの動き（ビデオ映像）をプロジェクターで拡大投影したのを見ながら一連の動きを覚える活動を行った。ペアを作ったの見合い教え合いを行った。ここでは、褒める・励ますといった肯定的なコメントをするよう促した。児童間のコメントは肯定的なものを中心に動きの順番に関するアドバイスなどもなされていた。さらに、クラスごとに体操を行い、実施後に他クラスからの拍手と、教師からのコメントというかたちで評価する活動を行った。その際、一連の動き

を、どれだけ覚えられているかを評価の観点とした。他クラスから大きな拍手をもらい、友達から個人的に自分の動きについて肯定的なコメントをもらい、満足する児童が多かった。教師からのコメントでは一連の動きを覚えるということに対する肯定的な評価のみならず、次時以降の活動への伏線として動きの質の高い児童を認めることも行った。

3時間目

先週までに比べ、急に気温が下がったため児童の動きが鈍かった。準備運動として1連の動きを2回行ったが、児童に発汗の様子は見られず、ウォームアップとして不十分であった。40分の授業であったので、計画した内容を実践するために、そのまま次の活動（動きのポイント発見）へと進んだが、児童はとても寒そうにしていた。本時は「突き上げ」と「向き変え跳び」の動きを深める時間であった。動きを深めるために、動きのポイントを児童に発見させようと試みた。そのために、パソコンによる映像をプロジェクターで拡大投影し、児童らにゲストティーチャーの動きを観察させた。児童らは2つの動きのポイント（①突き上げる前の膝の曲がり ②突き上げた際に足が地面から離れるくらいに全身が伸びていること）を発見した。「向き変え跳び」でも二つのポイント（①最後に手をあげた方に180°回転する ②向き変えとびは2回ずつ同じ向きに回転する。）を発見した。跳ぶ前の膝の曲がりについては教師の方でアドバイスをを行った。この後、発見したポイントを観点としてペアで見合い教えあいの学習を行った。

4時間目

ウォームアップを行った後、1連の動きを1回行った。その後「1回転」と「前後振」の動きを深める指導を行った。前時に引き続き動きを深める時間であったが、どちらかというと教師主導型であった。「空間を大きく使うこと」と「はずむこと」の二つを観点として「1回転」と「前後振」の動きを一斉指導の形式で行った。

5時間目

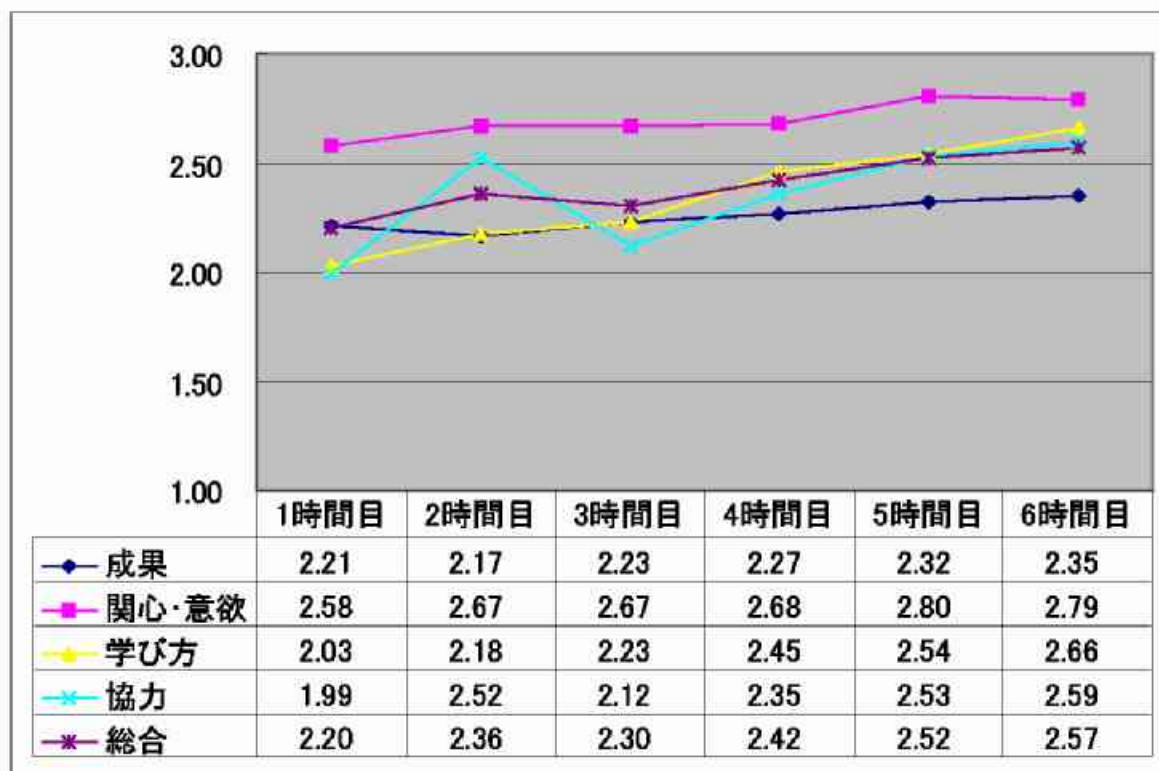
大縄跳びでウォームアップした後、1連の動きを1回行った。その後、クラスを2つに分けてグループを作成し、グループごとに練習をした。練習の成果を確認するためにグループごとにビデオ撮影を行った。時間の関係でこの時間中に自分たちの動きを確認することができなかった。

6時間目

ランニングでウォームアップを行い、1連の動きを1回行った。その後、前時のビデオ（グループごとの体操）を全体で見た。その際、「空間を大きく使うこと」と「はずむこと」の二つを観点として教師が良い動きを評価していった。その後、この二つの観点を意識しながらグループ練習を行った。グループごとに発表（ビデオで撮影）を行い、拍手で評価しあった。最後にビデオ撮影したものを全体で見て、自分たちの動きの深まりを確認した。

第2節 各学年の形成的授業評価

ア、5学年



図一1 5学年における形成的授業評価得点平均値の推移

成果

単元が進むにつれて徐々に平均値が向上する傾向がみられた。2時間目に比較的平均値が低くなったのは1時間目のゲストティーチャーの動きと、この時間にお手本としてプロジェクターで投影したビデオの動きが左右逆になっていたため、戸惑いを感じ、「わかった」「できるようになった」と感じられない児童がいたためと考えられる。投影するビデオとゲストティーチャーの動きを一致させるべきであった。

意欲・関心

単元が進むにつれて徐々に平均値が向上する傾向がみられた。5・6時間目に比較的平均値が高くなったのは、発表会に向けてグループで練習をしたためと考えられる。特に仲のよい友達でグループを作成したことが、楽しさや意欲が向上した児童が増えた主要因ではないかと考えられる。単元の終わりに発表会を位置づけることと、それに向けての練習をグループ単位で行うことが効果的であると考えられる。

学び方

単元が進むにつれて徐々に平均値が向上する傾向がみられた。4時間目に比較的平均値が高くなったのは、動きの質を高めることをめあてとしたことで、目的意識をもって取り組むことができたためと考えられる。また、ビデオを使用せずに教師の動きを見ながら練習を行うことで、めあて達成に向けての練習時間を確保したことも、この時間の平均値が高くなった要因ではないかと考えられる。児童にめあてをはっきりとめあてにむかっの練習時間を確保することが大切であると考えられる。

協力

単元が進むにつれて徐々に平均値が向上する傾向がみられた。2時間目に比較的平均値が高く

なっているのはペアを作ったの見合い教え合いを行ったためと考えられる。対人関係において最も基本的な1対1の関係において、肯定的な言葉を掛け合ったことがこの結果に結びついたものとする。単元始めの一連の動きをつかむ段階において、ペアで見合い教えあいを行うことが有効であるとする。

イ、6 学年



図一2 6 学年における形成的授業評価得点平均値の推移

成果

単元が進むにつれて徐々に平均値が向上する傾向がみられた。2時間目に比較的平均値が高くなったのは、分かりかけてきた1連の動きができるようになってきたためと考えられる。3時間目に平均値が低くなったのはパソコンの映像比較による動きのポイントを発見する活動に時間が割かれたため、動きの質を高めるような活動の時間が確保できなかったためと考えられる。練習時間を十分に確保することが大切である。

意欲・関心

単元が進むにつれて徐々に平均値が向上する傾向がみられた。2時間目に比較的平均値が高くなったのは、分かりかけてきた1連の動きができるようになってきたことと、ペア学習の際に肯定的なコメントをもらって満足する児童が多かったためと考えられる。単元始めの一連の動きをつかむ段階において、ペアで見合い教えあいを行うことが有効であるとする。

学び方

単元が進むにつれて徐々に平均値が向上する傾向がみられた。6時間目に比較的平均値が高く

なっているのは発表会本番であったため、目的意識をもって取り組む事ができたためと考えられる。単元の終わりに発表会を位置づけることが有効であると考ええる。

協力

単元が進むにつれて徐々に平均値が向上する傾向がみられた。2時間目に比較的平均値が高くなっているのはペアを作った見合い教え合いを行ったためと考えられる。4時間目に比較的平均値が低くなっているのは教師主導型の授業であったためと考えられる。単元始めの一連の動きをつかむ段階において、ペアで見合い教え合いを行うことは有効であると考ええる。また、単元なかの動きの質を高める段階では教師主導型の一斉指導は避けたほうがよいと考ええる。

5学年・6学年の形成的授業評価の結果から、リズム体操の授業実践において、ペアでの見合い教え合いを行い、その中で肯定的な言葉を掛け合うことは児童の協力的な学習態度を養ううえで有効な手立てなのではないかと考える。また、教師主導型の教え込むような授業は児童の協力的な学習態度を養ううえでマイナスに作用するのではないかと考える。

また、動きの質を高める学習において、6学年ではパソコンの映像比較による動きのポイントを発見する活動を行ったが、この活動に時間がとられ、練習時間が少なくなったために効果的な活動とはならなかった。5学年ではこの結果をふまえ、4時間目においてパソコンの映像比較を行わずに教師の動きを見ながら動きの質を高める活動を行った。その結果、学び方の効果が上がっている。これらのことから動きの質を高める学習においては十分な練習時間を確保することが、児童の学び方や成果を向上させるうえで、大切であると考ええる。

第3節 各学年の診断的・総括的授業評価

ア、5学年

表一6 5学年の診断的・総括的授業評価得点

	学習前		学習後		t値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
楽しさ(情意目標)	12.47	2.16	12.65	2.17	-0.6144
学び方(認識目標)	10.51	2.69	10.33	2.49	0.5539
技能(運動目標)	10.39	2.48	10.63	2.50	-0.7228
協力(社会的行動目標)	14.07	2.04	14.32	1.67	-2.4318 * *
合計得点	47.44	6.76	47.93	7.05	-0.6899

* $P < .05$ * * $< .01$

表一6は5学年の児童が体育授業に対する楽しさ、学び方、技能、協力に関する取り組み方について自己評価した得点の、学習前（診断的授業評価）と学習後（総括的授業評価）の平均値を示したものである。

楽しさ：平均値は学習後の方が高い。しかし、有意な差は認められなかった。

学び方：平均値は学習後の方が低い。しかし、有意な差は認められなかった。

技能：平均値は学習後の方が高い。しかし、有意な差は認められなかった。

協力：平均値は学習後の方が高く、有意な差が認められた。6時間の学習を通して協力的な学習態度の高まりを感じた児童が多いととらえられる。2時間目のペア学習で肯定的な言葉を掛け合い、よい雰囲気を作れたことがこの結果に大きく関与しているのではないかと考える。単元始めの一連の動きをつかむ段階において、ペアで見合い教え合いを行うことが有効であると考ええる。

イ、6 学年

表—7 6 学年の診断的・総括的授業評価得点

	学習前		学習後		t値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
楽しさ(情意目標)	12.36	2.32	12.65	2.04	-1.263
学び方(認識目標)	11.29	1.78	11.58	1.67	-1.185
技能(運動目標)	9.93	2.43	10.38	2.31	-1.698 *
協力(社会的行動目標)	13.36	1.64	13.90	1.54	-3.129 **
合計得点	46.95	5.77	48.52	5.03	-3.112 **

* $P < .05$ ** $P < .01$

表—7は6学年の児童が体育授業に対する楽しさ、学び方、技能、協力に関する取り組み方について自己評価した得点の、学習前（診断的授業評価）と学習後（総括的授業評価）の平均値を示したものである。

楽しさ：平均値は学習後の方が高い。しかし、有意な差は認められなかった。

学び方：平均値は学習後の方が高い。しかし、有意な差は認められなかった。

技能：平均値は学習後の方が高く、有意な差が認められた。6時間の学習を通して技能の伸びを感じた児童が多いととらえられる。特に6時間目の発表の様子をビデオで見て動きの深まりを確認したことがこの結果に大きく関与しているのではないかと考える。単元終わりの発表の様子をビデオ等で見ることは、児童が自らの伸びを確認するためのよい手立てであると考ええる。

協力：平均値は学習後の方が高く、有意な差が認められた。6時間の学習を通して協力的な学習態度の高まりを感じた児童が多いととらえられる。2時間目のペア学習で肯定的な言葉を掛け合い、よい雰囲気を作れたことがこの結果に大きく関与しているのではないかと考える。単元始めの一連の動きをつかむ段階において、ペアで見合い教えあいを行うことが有効であると考ええる。

5 学年・6 学年の診断的・総括的授業評価の結果から、リズム体操の授業実践において、ペアでの見合い教えあいを行い、その中で肯定的な言葉を掛け合うことは児童の協力的な学習態度を養ううえで有効な手立てなのではないかと考える。

第5章 まとめ

本研究では、作品提示型の授業（一連の運動として構成された作品を教材とする授業）展開でリズム体操の授業を行い、形成的授業評価による体育授業の「成果」「意欲・関心」「学び方」「協力」についての学習効果を検討した。また、診断的・総括的授業評価による体育授業に対する児童の取り組み方の変容についても検討を加えた。

本研究の結果から、リズム体操の作品提示型の授業展開について以下のように提言する。

- (1) 単元始めの「一連の動きをつかむ」段階では、ペアでの見合い教え合いを行い、その中で肯定的な言葉を掛け合うことが児童の協力的な学習態度を養ううえで有効な手立てである。
- (2) 単元なかの「動きの質を高める」段階において、教師主導型の教え込むような授業は児童の協力的な学習態度を養ううえでマイナスに作用するものとする。ここでは、児童のめあてをはっきりさせ、あとはめあて達成のための十分な練習時間を確保することが、児童の学び方や成果を向上させるうえで大切である。

¹ 高橋健夫（2006）体育のミニマムとは何か、体育科教育02：10-13

² 滝沢かほる編（1997）体操の学習指導、不昧堂出版：東京

³ 丸山久志（2001）「体づくり運動の実践研究」体育科教育、大修館書店：49

⁴ 松原利弘・滝沢かほる（平成15年3月）リズム体操の運動学的学習効果—動作分析と床反力による検討—「心と体の統合をめざした体育プログラムと実践的な評価方法の開発」（平成12年～14年度 科学研究費補助金研究成果報告書）：148-160

⁵ 松原利弘・滝沢かほる（平成15年3月）作品提示と作品創作のよる指導効果と問題点「心と体の統合をめざした体育プログラムと実践的な評価方法の開発」（平成12年～14年度 科学研究費補助金研究成果報告書）：137-143

⁶ 高橋健夫 編著『体育の授業を創る』PP235-238 大修館書店 1994

⁷ 高橋健夫 編著『体育の授業を創る』PP234-235 大修館書店 1994

（平成18年2月28日受理）

（本研究は、平成15～17年度文部科学省科学研究費「感性教育のためのリズムカルムーブメント・プログラムの開発（研究代表者：滝沢かほる）」研究成果報告書平成18年3月に掲載した。）